

「第2回シンポジウム講演要旨」

1. 「情報システム人材の育成—感性と論理の新たな対話を求めて」

佐伯 胖 青山学院大学社会情報学部教授、東京大学名誉教授

『要旨』ケンブリッジ大学のサイモン・バロン＝コーエン教授によると、人間の脳には、主に男性脳において優勢的な「合理的システム化」思考の機能と、女性脳において優勢的な「協調・共感」思考の機能の二つがある。男性優位に進められた近代科学と産業組織は、論理性と経済性を焦点化する「システム化」思考のみを重視してきたが、それによって周辺の人や物、状況の変化に対応する気配りや感性の情報取得とその処理が置き去りになってきている。講演では、アフォーダンス知覚や状況論をベースとした「共感システム処理」と、論理性と経済性を追求する「合理的システム処理」の相互対話こそが重要であることを明らかにする。

2. 「実践知としての情報システムを考える～問題感知力を磨き、情報を読み解くための論理的思考力とコミュニケーション力を身につける」

小林 義人 エム・スクエア代表取締役

『要旨』時代の潮流変化は、「社会の学習様式のあり方」にも根本的変容を求める。50年超のスパンで、社会と経済成長を牽引する基幹技術が質的に変化するからである。情報社会は、多様で異質な背景をもつ人々との不断の対話と共通理解を必要とする時代である。小職は、中堅ビジネスマン向けの研修プログラム「問題感知力を磨くための“問題解決手法勉強会”」を企画開発し実践してきた。変化が激しく未来を予測できない情報社会に求められる能力開発の基本要件の第一は、新たな出来事に対し自分の内面から疑問を持ち学ぶ取る「情報を読み解く力」即ち、「問題感知力」、第二は、「他者とコミュニケーションする力」即ち、チームマネジメントによる「問題解決力」が必須である。本論ではどのようなコンセプトに立って本プログラムをデザインし実践してきたか、教育課程から実社会にまでを貫く系統的情報システム教育体系の基本要件について問う。

3. 「のようなもの ～例を通じた学習の効果は?～」

江島 夏実 コンピュータ教育工学研究所代表取締役

『要旨』情報システム教育における「例」「事例」の効果について経験的な立場から論じる。30年近くに及ぶ教育現場の経験から、教育効果を高めるには、分かりやすく啓蒙的な「例」「事例」が不可欠であると感じている理由について示す。中でも、それを強く感じた例として、大手通信教育会社から「～のようなもの」という説明を求められた経験を紹介する。その感性を体系的に結実することを趣旨として、2008年4月から取り組んでいる「情報システム教育に有効な事例の整備に関する研究会」の活動内容を紹介し、また、最近の経験の中から、PBL教材、新しい国家試験である「ITパスポート試験」について紹介する。

以上●